

# 中世解体期 (Reformation以前) におけるキリスト教分派の神秘思想について<sup>①</sup>

渡 辺 義 晴\*

(信州大学 文理学部)

## I

12Cの後期から13Cの初期頃より、宗教改革以前に、ヨーロッパ各地に、Christliche Sekten が、いわば一齊に、あらわれている。その多くは原始キリスト教の Kommunismus、福音的貧困を理想とし、神秘思想を説いた。これは思想体系としては直接に近代の合理主義や個人主義につながるものではないが、当時の大衆の desire をゆびさしていること、社会改革運動にむすびついてきたことによつて、近代思想の研究、さらには近代哲学の成立を考察しようとするときに、無視できない意義をもっている。その主要なものを評論しよう。<sup>②</sup>

### I. イタリア、南仏の Sekten

#### Waldenser

北伊と南仏の諸都市には、遠隔地商業と都市工業の発展があり、近代的な資本家と無産者のめばえがあつた。すでに11Cミラノを中心としてPatarer (ぼろの麻服の意) という都市下層民の、富裕な僧侶や都市貴族に反抗する異端があつた。しかし、それは結局、ミラノの僧侶階級——ローマ法王とならぶほどであつた——をたおすの手伝い、都市貴族と法王との妥協の道をひらいたにとどまつた。ヘゲモニーは都市貴族がとり、このものはまだ独立をかちとるほどつよくなかつたので、法王と皇帝のいずれかと合従

#### 註

\* Assistant Professor of Shinshu University.

① 本稿は1952 Oct. 日本哲学会で発表した「中世神秘思想の社会的背景」の草案の一部である。

② 中世から近世への過渡期を哲学者はふつう Individualität の問題意識の発生過程としてとらえる(Windelband, Lehrbuch d. Geschichte. d. Phil. をみよ)。しかし、なぜ問題意識が変化したか、その動力を問うときには、思想の根帯である社会の実践の葛藤の場を迂回し、これを媒介としなくては研究は不十分である。Autorität-Individualität の過程は、Ausbeutende と Ausgebeutete の社会関係を通してみよという Kautsky の考え方は示唆に富む (Vgl. Thomas More und seine Utopie S. 72ff)。これは、しかし、思想史研究方法の重要問題である。哲学者が諸他社会科学者に学ばねば、じぶんの問題を掘りさげることができない時に今はきている。最近「思想」1952.11,12月号所載松村一人氏の毛沢東「矛盾論」にかんする論攻は思想史研究の方法論としても興味あるものである。

Sekten の哲学史的研究はあまりない。筆者の利用できたものは、O. Dittrich, Geschichte der Ethik, この第三巻にでている Sektenwesen は体系的興味を中心になつてゐる欠点はあるがくわしい。宗教社会学的研究には Tröltzsch の全集第一巻 Die Soziallehren der christlichen Kirchen, および第二巻 Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie, 社会思想史的には Kautsky, Vorläufer des Sozialismus 第一巻, Beer, Allgemeine Geschichte des Sozialismus und der sozialen Kämpfe (邦訳あり), Sekten の原資料はととも入手できないが、わずかに Büttner の Meister Eckhardt Schriften, 以下の Sekten 各派の略述は主として Kautsky の前掲書によつた。

して、いずれか一方の収奪に対抗する方法をとつた。そして結局は法王支持に傾いた。それは法王権をバックとしてキリスト教国にのぞむのが有利であつたからだともおられる。だからこの地方には早くから、カトリックの信仰など無視した思想ができてはいたが(後の Humanismus の性格と関係があろう)、Apostelbrüder の運動がでるまでは、法王制に対立しない。本格的反法王運動は、いちおう、南仏からおこつたといえよう。

南仏には 12C はじめから Katharer (純潔の意) と一般によばれる Sekt があつたが、Waldenser はその一つとみられる。Peter Waldus (1170頃活動) からおこる。Humiliaten 或は Povres de Lyon とよばれた。支持した主勢力は手工業者、とくに織工である。

マ=教の影響をうけ、Dittrich はこれを Neumanichäismus とよんでいる。Manichäismus は Gnostik のなかにはたらいだが、Augustinus にひどく攻撃されたものである。霊肉の極端な二元論—キリストの神人的性格の否認、いわゆる docetism—、しかも神人の神秘的合一を説いた。これは正統派からみれば教会権威を無視した不遜な態度で、人間の神化 Vergottung des Menschen をくわだてるものとみられよう。Katharer, Waldenser にも、こうした二元論と神秘思想がある。天上の光と地の暗とは対立する。キリストは天子の最上のもの、全く霊的なもので、真理をつげ知らせ、外見上の受難のうちに、目にみえぬ天界にかえつてゆく。イエスを通して、「精神的」洗礼、すなわち Consolamentum が成就する。外からおさえつける教会はうけつけないが、内面的自由による霊的な教団はみとめる。いな、このような Katarer Kirche を通してのみ、迷える魂は天の故里にかえることができる。真の Kirche を知らないで死んだ人は、いろいろな人間又は動物の肉体となつてさまようている。人の死はすべての人におなじ意味をもつのではない。Katharer の 成員にとつては、死は天国への門であるが、そうでないものには別の肉体をとるための首途にすぎない。ところで、救済をのぞむものは生活を純粹にしなくてはならない。罪の本質は物慾的衝動にあり、財産の私有、俗人との交際、誓約、欺偽、戦争、動物の殺生、性交、このようなものは大罪とされた。興味のあるのは、Katharer は仲間を perfecti (完成派) と discipuli (弟子派) とに区別したことである。前者は後者をおしえ、なぐさめをさずけ、かれらだけが父なる神にいのり、すべての discipuli にかわつていのる。かれらは大罪をおかさぬように特にきびしい義務をもつ。perfecti のあいだでは、財産共有、結婚禁止が文字どおりおこなわれる。discipuli には妻帯、財産所有がゆるされるが perfecti をやしなう義務がある。

すぐわかるように、このような Kommunismus はカトリック教会には批判的であるが、積極的具体的な政策の内容が貧寒である。そこには、むしろ、Gnostik にもみられたような貴族的要素さえある。それだから、それは支持層や時代の性格の変化によつて

③ Ditririch は Sekten を Rationalismus と Biblizismus とに大別し、これをさらに細別して解説している。Neumanichäismus は Rationalismus のうち metaphysisch-ethischer Dualismus のタイプとしている。合理主義とは科学思想をいみせず、理性—主観に重点をおくというほどの意味。

かなり社会的機能をかえるものであつた。農民や Bürger の支持が主となれば、bürgerlich-protestantische Sekten となり、無産階級的要素がかつときは、熱情的な kommunistische Sekten となつた。なお、この派では 1. 教育活動に熱心であつたこと（これは科学愛好という意味ではない、むしろ反対。相互修養）2. 伝道旅行、組織活動が義務とされた。そのため、北伊、フランス全土、ドイツ、ボヘミヤにひろがり、どこでも大衆運動の芽をつくつていつた。

南仏の異端は泥棒騎士を主力とする仏王の十字軍により征伐されたが（1249）、それ以後、フランスの王権が圧倒的につよくなり、王権は法王制を自己の政治的道具とするにいたつた。挫折した Waldenser はアルプスを越え、まず、Piemont や Savoyen の溪谷に出て、そこで農民層のなかにはいつた。

#### Apostelbrüder :-

イタリアの Patarer の流れは Waldenser その他異端と混合し、13C Apostelbrüder の運動として力を得てきた。指導者は Gerardo Segarelli (1248—1300)。Lombardei の下層民に支持される。「かれらはお互を、原始キリスト教徒のように、兄弟姉妹とよぶ。ひどい貧困のなかにくらし、じぶんの家、たくわえをもたない。およそなにか楽しいものというものをもとめず、所持しない。腹がへると、何であろうとさしだしてくれたものをたべる。かれらに仲間入りする物持ちは、もちものをすつかり投げだし、兄弟の使用にまかせる」Mosheim, Ketzergeschichte S. 224 ここにも貧困礼さん、禁慾思想、その上にたつ空想的神秘的な Kommunismus がみられる。

この運動は Dolcino (1370死) によつてもつと實際的、行動的となつた。Dolcino は Joachim von Floris (1145—1202) の思想、聖書の予言者の記録や黙示録にでてゐる Apokalypse や Chiliasmus の神秘思想をうけついでた。Joachim は世界史を三区分し、1. Status des Vaters 父は恐怖であり、この時代には律法が支配する、2. Status des Sohns 子は知慧であり、躰けが支配、3. Status des heiligen Geistes 聖霊は愛であり、自由が支配する。今やこの第三時代がくる。Joachim はこれを 1260年に充実すると予言した。悪に対する最後の勝利、永遠の福音 evangelium aeternum の時代となる。この時代になれば、これまでの教会も聖書の精神がはいつてよみがえるだろうと期待された。しかし、Dolcino はそれほど樂觀的でなく、愛の支配が実現するためには、教会、僧院のすべての組織を止揚し、原始キリスト教の使徒団体を再興させねばならないと考えた。これを実現させるのに、Brüder だけでは力不足とし、王者の身分にある Messiah を期待し、これを Hohenstaufen 家の Friedrich II にもとめた。神秘家をそうおもわせたのはこの Sizilien の王が法王と戦つてゐるのをながめてであつたらう。しかし、Dolcino の不幸は、一時的副次的な矛盾を原則的主要矛盾と混同した点にあつた。Friedrich の仏王との妥協に裏切られて、かれは同志を農民のうちにみいだした。使徒団体再興の運動は農民戦争となつた。

農民戦争発生 of 社会史的原因は——ただイタリアにかぎらなくてもよい——、都市の勃興にともなう貨幣経済の進化にあるとみられる。都市の商人、手工業者は生活資料、原料を農民から買う。農産物の商品化がすすみ、地主は貨幣をもとめる。封建的現物買

納や賦役の貨幣地代化がうながされる。農民もこれを好むようになる。というのは、そのことによつて、かれらは自己の生産物の主人であることができ、つまり自由人の資格を得るからである。しかし、地主と農民の対立はそれだからといつて緩和されないで、逆にするどくなる。1. 以前には地主の慾望にはかぎりがあつたが、貨幣への慾望は無制限となり、できることなら農民を無制限に収奪しようとする。これに対し、農民はいまでは市場を知っている以上、地主への貢納と負担は、じぶんが享受できる幸福の可能性をあきらめさせられることを意味し、それだけ耐えがたい。2. 都市が農民をうけ入れる場所となつてくるため、土地に農民をつないでおこうとする地主の努力はさらに intensive になる。3. 土地の所有が高価な特権となつてくるため、マルク共同体の成員はマルクの土地を共有の財産として積極的にまもろうとするが、他面、地主はできるだけこれを私有化しようとする。このような対立要素は、経済的進화가すすむにしたがつて、よりあらわとなる。地主と農民の対立抗争が、地方的範囲を越え大規模となると農民戦争といわれるわけである。

ここで社会進化の動力を考えるとときに原則的にだいじな問題を指摘したい。ふつう市民的学者は大衆の地位が改善されるにつれて、社会改革の意味はなくなるというが、この場合注意しなければならない点は、改革運動（たとえば sozial-demokratisch な運動）は大衆の絶対的みじめさを発条とするとはばかり考えてはならないことである。みじめさの具体的内容は社会的歴史的なものであつて、社会改革は原則的には、階級間の対立関係によつて生みだされ、うながされるのである。13C イタリアの農民の地位は以前にくらべて改善されつつあつた。都市が生活圏に入る可能性は増大、地主は困窮した。たとえば十字軍の失敗にともなう経済負担は、今日の国家制度ではあげて国民大衆の上にかげられる（租税、国債制度）にくらべて、近代国家制度のない中世では、支配階級自身の負担になつた。十字軍後貴族の困窮、とくに小貴族の没落はヨーロッパの各地方にみられる。さらに、農民が戦争に参加し、騎士に匹敵し、いなこれをしのぐ歩兵軍としてはたらいしたことは、かれらの軍事技術的能力をやしなわせたことになる。このように経済的社会的軍事的地位が向上し、それだけ実力に対して自信をもつということは——もちろんこれを過大に評価するのは絶対にまちがいでとしても——Klassengegensatz を緩和するものでなく、むしろ反対である。

Dolcino にひきいられた一揆部隊は Piemont のアルプスから、奇襲によつて平原の Vercelli 近方を占領、武装蜂起をおこなつた。しかし、このために社会改革の原則論は後退し、軍事的勝利のみおもうにいたり、失敗した。一揆の支持者は Apostelbrüder のほかに、農民、さらに冒険家、失業傭兵などがあつたが、いわゆる掠奪に興味をもつ連中も多かつた。また、農民自身、思想的に Apostelbrüder の Kommunismus をほんとに理解しないで、小所有者として、自身の利益のために、地主領主にたやすく譲歩した。そのことが、戦略的にもこの運動の国際的意義を知つていた支配層にたちむかつて、失敗した理由をなした。この騒動以後、イタリアはもとどおり、法王制を保守するにいたつた。Apostelbrüder はイタリア以外の地方で Waldenser や Begharden と融合していつた。

## II Begharden

アルプスの北側、Flander や Brabant 地方は交通の要地であり、その海岸の砂丘荒地が羊飼育に適した事情などから、羊毛工業が発達し、13C Flanderでは織布の輸出向工業が成立している。資本主義的経営に依存する織工があらわれたが、Beghardenはこの地方にできた kommunistischer Sekt である。その名は乞食を意味する古語からくる。11C あらわれた未婚女子の信仰集団 Beguinen に対し、未婚男子のあつまり。主として織工よりなり、Weberbrüder 織工兄弟ともよばれた。共同の家に住み、共産主義的な家事経済をいとなみ、成員の手工業でくらす。そのかたわら、貧者や病人の世話をする。Begharden の家ははじめ Brügge にでき、その他の都市におよんだ。成員はじぶんの労働とか相続による一定の私有はゆるされたが、それも生存中にかぎられ、死後は共有、だいたい財産は共有の建前である。このような集団が個々の手工業者にくらべ、家事経済でも生産経営の点でも、優越していたのは当然で、手工業親方たちの Zunft はこの集団と対立した。Mosheim はいう「Gent その他の市庁は織物手工業者の Zunft に要求されて、Begharden の勤勉を阻止し、Begharden の組合と Zunft とを和解させ、公共体の平和を保持しなくてはならなかつた」(De Beghardis et Beguinabus commentarius, Kautsky の著書より引用)しかしながら、無所有大衆からはひじように愛された。というのは Begharden の生活費は安く、過剰の収入はすべて貧民救済にあてられたからである。

13C ドイツ、フランス、イギリスに急速にひろがつた。それには都市が Flander の織工をもとめた事情とかんけいがある。単に毛織物業だけでなく、麻布、綿織業のうちにも Begharden 風の宗教的禁慾的、そして共産的な集団がつくられた。この普及の過程で、はじめは正統派にとつて無害とみられていたのに、しだいに異端とされるようになった。そこから Begharden 内部の分裂がおこつた。1. 世俗の事柄を禁慾的に逃避するもの、2. 現存社会の不正義を除こうと積極的に社会改革的実践にむかうもの。前者は Franziskus の乞食僧団と合流し合法性を保ち、後者は野党的になる。フランス、イタリアからの亡命移民の増加はこの風を助長した。というのは、南仏の異端征伐以後、異端は好んでドイツにきた。この国では仏伊とちがい、法王制をそれほど固持し、異端糾問に熱心でなく、却つて Waldenser や Apostelbrüder などは領主の領地や都市でかばわれたからである。しかし Ludwing Bayern の死後、Karl IV のもとで 14C 後半からはひどいカトリックの反動期になつた。

Begharden に合流したものに、そのほか、北仏におこり、のちライン河流域に普及した「自由精神の兄弟」Brüder und Schwester des freien Geistes がある。Amarlich von Bena (1207死) の思想系統にぞくする。Amarlich は Eriugena (9C) — さかのぼつては Plotinos の新プラトン派 — の影響をうけ汎神論的、その根本思想は 1. 神はすべてである。2. キリスト教徒はみなキリストの肉体を分有する。3. 愛 caritas にみちたものは罪をもたない。これは法王制の Hierarchie にするどく対立する。もつとも、各人はそれぞれの衝動にしたがつてよく、それは神の意志である、という考えかたは、Begharden の純潔精神と相容れないものがあり、一種の Anarchismus に

なるが、この派が特に不平等をきらい、財産の私有（婦人の独占をふくむ）を排斥したのは、当時社会的に疎外された無産者に歓迎されたものと考えられ、その点で社会機能的に Begharden に通じるものがあつた。David von Dinant (1215死) は指導者。なお、Eckhart (1260—1327) も Begharden に合流した異端にいれることもできるだろう。かれもまた汎神論的で、神の王国を精神の内面にみる自由思想或は Anarchismus がみられはするが、他方、原始キリスト教の無所有に対するあこがれも強烈である。じつさい、Begharden と混同されて、支配層から糾問されていたのである。

### III 英国の Lollharden

#### Wyclif の運動

英国では法王制とのたたかいは national な規模でおこなわれた。それは対仏戦争（百年戦争1339—1456）でいつそううながされた。フランスが法王制を自国の道具としていたので（Avignon幽閉）、対仏戦は対法王戦と内容をひとしくした。その戦争目的はフランスの Flander 独占を阻止する点にあつたが、貴族と市民階級とは対 Flander 羊毛貿易の利害の共通を媒介として統一戦線をとることができた。騎士はその掠奪慾から、農民は傭兵需要の増大が就職口をひらく点、或は騎士の掠奪を防止できる点、などから一応戦争を支持したのである。

Wyclif (1320—1384) は doctor evangelicus といわれ、聖書中心説。法王の権威は聖書を勝手に比喩的に解釈することにもとづいているが、聖書に忠実なれば、教会が人を強制し、さばく権利はない。キリスト教徒の救済と恩寵は制度的にではなく、聖書の教えにもとづく道徳的観点から問題にされねばならない。かれは内面的 Gesinnung の尊重、道徳的倫理的規準を強調しており、ひとびとが神の僕であることを心より承認する謙遜と神への愛を諸徳の根本と考える。原始キリスト教の evangelischer Kommunismus, キリストの貧困をたたえ、平等な貧困、財産の平等な分割を理想とした。しかし、かれの僧俗区別の廃棄論はかならずしも教会一般の否認ではなく、外国（仏）の支配手段になつた教会を、自国の（国王貴族の）手段にさせようとしたもので、Landskirche の要求であつた。Wyclif 説が貴族に支持されたのはそういうわけである。

#### Lollharden

異端的運動は支配階級内部にとどまらない。反法王のたたかいを支持した層のなかには Norfolk, Kent 地方を根拠地とする無産者、とくに織工で Begharden 的なものがいた。英国ではそれは Lollharden といわれた。

（歌う人の意、葬礼のとき万般の世話をし、かなしみの唄をうたつた）この派の普及した大きな理由として、つぎの事情がある。英国の毛織業促進政策として Flander から織工の入国を歓迎し勧誘したが、これに応じて Flander 織工の特に貧しい連中が多数英国にきた（Norfolkはその定着地）。かれらはきてみて、めぐまれた生活に対する期待がはずれると、当然、かれらの多くがいただいていた Begharden の理想を固執し、これを宣伝するにいたつた、と考えられる。かれらは対法王闘争の点で支配層を支持しはしたが、本性上反特権階級であり（Lollharden の Motto—Als Adam pflügt' und Eva spann, Wo war wohl da der Edelmann? ）、とくに対仏戦後、地主の農民に対する攻撃（農奴制復活強要、ペストの流行にともなう労力不足、労賃騰貴）に対し

て最高賃銀制、絶対労働日延長などの地主保護政策、1349 Eduard III の法令)をうけた農民の不满とむすびついた。1381 の農民戦争のなかでは Lollharden とその思想がはたらいた。国王や貴族はこれを危険な仲間と感じはじめた。かれらの興味は教会財産の没収にあつたのだから、いわゆる Kirchenspaltung (1378) によつて、法王制がフランスの独占でなくなつてからは、法王に妥協した。Lollharden はもちろん、道徳主義的な Wyclif 説さえも異端としてしりぞけられた。

#### IV Taboriten

##### Hussiten 運動

14C Kuttenberg と Taboriten の銀坑の発見以来、鉱山業を軸としてボヘミヤの商品生産、資本主義化がすすむ。それが国民的自覚の基礎となつたが、いろいろのかたちの社会的対立をうながした。法王的教会——国民、商人——消費者、親方——徒弟、資本家——家内工業、地主——農民。殊に銀鉱の増産はいわゆる Preisrevolution をひきおこし、賃銀労働者や小貴族のように貨幣収入にたよるものにはとくに打撃であつた。ところで、これらの諸矛盾は、ひとまとめにして、ドイツに対する国民的対立といふかたちであらわれた。

ボヘミヤの産業開発は主としてドイツ人によつておこなわれたので、Kuttenberg はじめ多くの都市はドイツ人のものであり、教会や大学もそうであつた。チェコ人は都市でも農村でも、被支配者であつた。そこから反ドイツ皇帝、反法王の運動がおこつた。1411 年法王の免罪符販売を機縁として、この運動は急に活潑になる。指導者 Huss (1364—1415) は、だいたい Wyclif の説をとりいれたもので、これを支持した階層は二つに大別される。一つは Calixtiner 或は Utraquisten とよばれ、少数のカトリック派貴族をのぞく大多数の貴族と Prag 市に擡頭したいわば民族ブルジョアのプラダ派よりなる。他の一つは、農民、小市民、無産者、つまり国民大衆よりなる Taboriten (聖書にでる Tabor にちなんだ名の町を根拠地としたのによる)。前者は教会の収奪、Kuttenberg におけるドイツ人勢力の駆逐に満足し、社会改革の意志はない。むしろ運動のヘゲモニーが Taboriten にとられたのに不安を感じる。後者、Taboriten の思想は原始キリスト教的で、Chiliasmus 的的空想と熱情にみちている。いまや地上には王侯の支配というものはなくなつた。したがつて臣下なるものもない。あらゆる貢納租税はやめてしまうべきである。なぜなら人間はみな兄弟姉妹であるのだから、およそ他人に強制するようなことはあつてはならない。Tabor の町では、そもそも、私のもの汝のものといわれるものはない。統治は人民すべてにゆだねられているので、あえて王といえば神よりほかない。領主、貴族、騎士などという連中は雑草のようなもので、つみとらねばならない。あらゆるもつたいぶつた支配者の法律はどうせ人間のつくつたもの、発案したもので効力はない。つぎに神の尊崇であるが、これは教会の仲介による必要はない。聖像崇拝、滯罪火の信仰はおよそよくないものである。またキリスト教徒は Magister や Doktor など学者を尊敬してもならない。聖書自身を信ずべきである。

Tabor には共同金庫の制度と平等な義務負担による兵役制又は軍政がおこなわれた。しかし Taboriten のうち、いかに急進的なものが共産的であろうとしても、それ

は単に理想としてであつて現実化しなかつた。当時の経済的水準では手工業者や農民がすべて生産手段をすべて共有としたのでは、生産が保たれず、いわんや発展できなかつたであろう。私有財産の否定は空想的要望としてはともかく、生産関係の必然的要求と一致しなかつた。ここに興味ある問題がある。そこで Hussiten の運動はその発展過程のなかで、まず Calixtiner と Taboriten の分裂があり、さらに Taboriten も厳格な共産制を主張するものと、現実にあつて妥協する穏健派への分裂があり、その内部矛盾は敗北を招いた。Taboriten は「ボヘミヤの兄弟」Böhmische Brüder の運動のなかに生きのこつたとみられるが、この派のうちでも、純粋に福音的貧困を説くものはすたれ、現実的なものがヘゲモニーをとるにいたつた。市民的營利追及をゆるし、世俗国家の役人になるのもよろしい。国家の侵略戦争もやむをえなければみとめよう (Kommunismus の思想とは矛盾する)、というようなかたちの禁慾主義、Puritanismus がでて、Luther、もつとはつきりしたすがたでは Calvin などの Protestantismus に道をひらいてゆく。

## II

宗教社会学者 Tröltzsch は Katholizismus や Protestantismus とならべて、Sekten に注目し、その社会思想史的類型化を試みている。<sup>④</sup> われわれがとりあげた Sekten をかれは中産階級或は無産階級 (Mittelstand, Proletarier) の思想であり、民主主義的性格をもつたものとみている。

Sekten は教団の神聖を、その制度そのものとか、そこに恩寵の宝が蔵されているという点にみるのではない。キリスト教徒の実践的倫理的な Leistung に重点をおく。教団は聖書の精神に従つた純潔な信者のみの集団である (僧俗区別の無視)。教団諸制度は、信者の道徳的訓練と相互扶助の激励のためにこそある。そのさい、Dogma ではなく、聖書こそ権威である。かれらは世俗的な権力を拒否し (そこから侵略戦争の否認、絶対平和主義がでてくる)、国家の官僚や司法を、誓約や世俗的榮譽をしりぞける。財産の独占は隣人愛の見地から好ましくないものとみて、かれらは全くの共産主義になつてゆく。こうした峻厳ではりつめた心情にあるとすれば、現世の俗悪にがまんすることができない。かれらは現存社会のあらゆるものは絶滅するものであり、キリストの再臨による地上における天国、神の国の到来を信じる。かならずそれは到来するがゆえに、世俗をすてた生活は神国到来までの過渡的臨時的方法であるとおもう。このような教団の精神が支配層ののではなく、中産下層階級の mentality に合致するのはしぜんである。そこで Sekten は大衆の民主主義的本能、社会改革の念願を自己のものとし、ついには革命行動にうつることさえあり得たのである。そのような態度はすべて宗教的に合理化されなくてはすまされないが、かれらはそれをこう考えた。いまや神国到来の時は満ちた。キリスト再臨の日はきた。その最後の審判日においては、どこまでも耐えしのぶという命法はすてられてよく、墮落せるもの、異教的なものを征服する戦が必要で

④ Tröltzsch 全集第一巻 S. 385ff. Das absolute Gottes-und Naturrecht und die Sekten. および第二巻 S. 148ff. Sekten und Mystik.



ある。かれらが新約とならんで旧約をおもんじたわけも、神の光栄のための戦争、暴力的改革の権利を合理化する思想が旧約の方こそみちているからであつた。Sekten のこのような考え方では、Thomas で代表されるような、国家社会（罪の世界）、これと同類の教会を合理化するような自然法は承認されるわけがなく、原始状態、自由・平等・博愛・財産共有以外をみとめない絶対的な自然法が主張される。教会の説く自然法は世俗界を詭弁的に合理化するにすぎない。それは神の理性をも、神の啓示をも否認するものである。Sekten のとらえた自然法が民主的共産的の性格をもつようになったのはしぜんの成行であつた。

Tröltzsch のこの評価は、だいたい、歴史的事実につつまのといえる。ところが、かれは Sekten とは別に Mystik を一派としてかぞえ、これを前者と区別しなくてはならないと説いている。Mystik は大衆層とは関係はなく、民主主義的性格はないというのである。キリストは精神であり、目にみえない力をもつてひとびとの心のなかにはたらくものである。山上の垂訓を神の法或は自然の法としてとらえる要はない。だいたいなのは直接的感情であり、心のなかに内在する神、キリスト、それがすべてである。神との冥想的融合、魂の平和こそ重要である。聖書はなるほど権威にはちがいあるまいが、それは心の解釈を通してはじめて成立するものである。聖書の言葉そのものが権威をもつのではない。このような立場からは、およそ教団を正当づける根拠がみいだされない。Mystik からみれば Sekt はこれまでの教会にくらべて、よりかたくなな、より外面的な、より拘子定規な教団のおしつけにすぎない。キリストの精神を体した目にみえぬ教会 unsichtbare Kirche der Gemeinschaft des Geistes Christi があるのみ。教団らしいものがみとめられるとすれば、それは一種のクラブのようなものにすぎない。キリスト的自然法は問題にならない。もしあるとすれば、それは精神とか理性の根底にある宗教的感情とでもいうものであろう。精神の自由がすべてである。それだから、Mystik には貴族的精神主義的な思想さえ指摘できるので、民主主義や平等思想とはかかわらない。Mystik においては教養一般の主観化、内面化、分散化 Subjektivierung, Verinnerlichung, Differenzierung が目立ち、それは僧侶階級に対する俗人の地位の独立を前提としておると考えられる。Mystik が中世後期とりわけ都市に発生したのは偶然ではない。

Tröltzsch は Sekten として Waldenser, Wicliften, Hussitismus をあげているのに対し、Mystik の例に Eckhardt らのドイツ神秘主義、スコラ哲学の Viktoriner, Bernard, Franziskaner, Dominikaner をあげている。そしてその源流はとよく、Gnosis, 新プラトン派にあり、Pseudo-Dionysius, Eriugena を経由していると説いている。

思想の= エンスをこまかく類型化してゆこうとするこの態度はたしかに傾聴にあたいするものである。われわれも Sekten の紹介のなかで、たとえば Amarlich の系統をひく Brüder des freien Geistes や新プラトンの Eckhardt において注意したところである。しかしながら、Tröltzsch も承認しているように、Sekten と Mystik は区別できないまでにとけ合つて登場している。かれが何気なくのべているこの事実、

案外に、思想の社会史的考察には重要なものではあるまいか。Mystik の要素として、かれは Pantheismus の傾向を特に注意しているようであるが、このようなあいまいな、その社会的機能の点からみれば、しばしば互に反対的な立場になり得るような思想を一義的に類型化できるであろうか。もちろん、Tröltsch は Mystik を Pantheismus にのみかぎっているのではなく、おそらくは、思想の心理的構造の類同性、たとえば内面的感情の重視といった点から類型づけようとしたとみるのが妥当であろう。それだから、Mystik はしだいに宗教哲学のなかに解消され、そのうちに生かされてゆくもので、Spinoza, Geulincx, Leibniz, Lessing, Hamann, Herder, Jacobi きては Hegel, Schelling, Schleiermacher の宗教哲学が Mystik であるともいつているのである。しかし、こうなつてくると、心理的構造を規準とする Typisierung がいかにも形式的で無内容となつてくるのではないか。およそ思想の意味は生きてはたらく場面においてあらわれるのであつて、思想の性格は実践的社会的に検討されなくてはならない。Waldenser 説伏のためにたまたかつた Bernard や Dominikaner を、これと敵対的な立場をとつた Eckhardt や 自由精神の兄弟と思想的に同類型とみることはできない。ひとしく Franziskaner といつても師祖の死後カトリック的な合法派となつたものと、異端の側にはいつた Tertiarier 派とは区別すべきであろう。<sup>⑥</sup> Tröltsch のような心理的類型化は、意外に、歴史を抽象した見方だといふことができる。

われわれの興味はむしろ、中世解体期の Sekten がその共通の性質として神秘主義の性格をもつていた点にある。現代の Sozialismus が科学性を標榜しているのに対して、この時代の大衆的社会改革思想が、合理主義とは逆な、空想的神秘的なものであつたところに問題をかんじるのである。Tröltsch も実際上みとめているような、Sekten の Apokalypse, Chiliasmus, これはいつたい何であるか。われわれはこれを神秘的思想だとよぶのである。そこには科学性に対する嫌悪反感がみられる。これはいつたいどういうわけであろうか。

古代社会がその矛盾によつて没落にむかつたとき、当時の疎外された無産者は現実の世界から空想的神秘的な領域に逃げ、超現実的なものに対して、かれらの desire にしたがつて形をあたえたと考えられる。Lumpen Proletarier としての初期キリスト教徒は、みずからの将来をきりひらく現実的実践的自信をもたなかつた。現実の真相を知ることはいかに耐えがたいことであつたから(そこから科学への嫌悪がうまれる)、富

⑥ Franziskus 自身、乞食団の規則を聖書の言葉によつて起草した。1. 「なんじもし金からんと思へば、往きて汝の所有を売りて貧しき者に施せ、されば財宝を天に得ん」2. 「旅のために何をも持つな。杖も袋も糧も銀もまた二つの下衣をも持つな」3. 「人もし我に従ひ来らんと思へば、己をすて、己が十字架を負うて我に従へ」。ここには Sekten と共通な思想がでている。

いつたいカトリック成立により、原始キリスト精神は大衆の異端分派とされ、Augustinus はこの掃滅のため奮闘したが、福音的神秘思想は大衆の desire として存在し、修道院は初期にはそうした野党的役割をもつた (Kautsky, Ursprung des Christentums 第五章第五節参照) 修道院が腐敗して、かわりに乞食僧団が現われ、これがカトリックに臣従するようになつて Sekten が一齊にでた。Franziskaner の第三派は殆んど Sekt である。1381 英国の農民戦争の指導者 John Ball はそれで Begharden の Bundesgenosse であつた (Kautsky, Vorläufer, Bd I S.295)

者に対する無限の憎悪は空想と神秘の世界で解消されるのであつた。<sup>⑥</sup> われわれのあつた時代は大衆のあいだに、原始キリスト教徒の状態に通じるような、絶望と *desire* をひきおこしたときである。それをうながしたものは、しだいにおしよせてくる資本主義、商品生産とそれともなう社会の変貌過程であつたとみられる。Sekten の神秘思想が特に都市を根拠としてあらわれた真実の理由はそのへんにあるだろう。われわれは Sekten の指導勢力が多く織工その他の手工業者であつたことをのべた。しかし、かれらはまだ自己の未来に自信をもつほどではなかつた。<sup>⑦</sup> 将来に現実的な希望をかけ得たのは都市商業ブルジョアとそれに妥協し、或は支持された国王、その諸官僚であつたともいえよう。Humanismus の現実主義を支えたのはこのような層であり、それはやがて近代科学の合理主義的思想につながるとおもわれる。あかろい合理性への憧憬とそれを現実的にしようとする意志および自信はすくなくも大衆のものではなかつた。大衆は社会の変形過程のなかで、じぶんたちに蔽いかぶさつてくるくらい運命を、いかんともできない力とみて、結果としてあらわれた眼前の社会的害悪に怒り、絶望するというふうであつたであろう。現実はいかになくさめなきものとなる。ただ奇蹟によつてのみ、貧者をおさえる傲慢な支配者をたおすことができる。“Gottes Stimme”, “Offenbarung,” “Innere Erleuchtung” はこのようにして重要である。その信念と空想に熱中して、合理的根拠なく、他人にも伝導できるし、また伝導しなくてはならないと考えるにいたつたのであろう。

およそ将来はじぶんたちのものであるという自信と、これをうらずける必然性があつてはじめて、現実分析の科学性は承認され歓迎されるようになるのである。Sekten の大衆はそこまできていない。かれらの平等と博愛の共産主義は現実的技術的力のない神秘主義に支えられている。このことはかれらの Kommunismus がいつでも消極的な禁慾思想 Askese とむすびついて成立していることと関係がある。この点でも原始キリスト教の思想と似ている。しかし、われわれは古代の Askese と中世解体期のそのあいだに無視できない相異があるとみとめずにはおれない。原始キリスト教徒はなんといつても労働を尊重する大衆ではなかつた。これに反して Sekten に指導された手工業者や農民はきわめて勤勉な労働する人々であつた。このちがいは思想に反映しないではおくまい。そうみると、Sekten が積極的に、しかしいくらか唐突に、社会改革の実践にのりだした点も注目されてくるのである。原始キリスト教徒はただ救済と慈悲をのぞんだが、Sekten の Askese は労働の価値と実力を知り、技術的建設的な態度を、たとい萌芽的な形であつたにせよ、含んだものであつた。ただ当時の社会の経済的発展水準

⑥ Kautsky, Ursprung d. Chr. では原始キリスト教団の特色として、だいたい、1. 教団が無産者であること、2. 富者に対する階級的憎悪、3. 消費本位の共産主義、4. 家族の否認、5. 神秘的な救世主観念と神国論、をあげている。なおルカ伝 12章 22節の解説を中心として、原始キリスト教の Parasitism を説いているものに Paul Lafargue, *Social and Philosophical Studies* p. 18ff がある。

⑦ これの確認のためには歴史家の業績を参考にすること、増田四郎「西欧市民意識の成立」ピレヌ「中世都市経済」邦訳白揚社、概観的にはクノー、世界経済史(邦訳)第三巻など。

は、かれらを科学の友とし、文化の発達、生産力の向上こそじぶんらの使命である、というまでに意識させなかつたことは確認されねばならない。(1953. 1. 29 記)

---

**On the mysticism of christian sects in the falling  
period of the middle ages (before Reformation)**

By

Yoshiharu WATANABE\*

Approximately in the beginning of the thirteenth century there appeared many christian sects in european countries one after another. Before Reformation the important ones among them were: Waldenses, Apostle-brothers, Beghards, Lollards and Taborites.

This article is aimed to point out the mysticism as the common character of these sects (1) and to explain their position in the history of social ideas. (2)

(1) Chiliasm and apocalypse, peculiar to the sects, can be taken as a mystical way of thinking. Ascetic puritanism and the principle of equality of the sects were connected with the mysticism.

(2) The evangelical communism may be regarded as a fore-runner of the modern democratic socialism. It expressed a somewhat revolutionary spirit of the middle-and lower-class people who supported the sects. But, it could not go beyond the boundary of the subjective enthusiasm which had no intention to the real improvement of the social conditions and the civilisation in general. In this respect it showed the conservative tendency of the sects.

---

\* Assistant Professor of Shinshu University.